

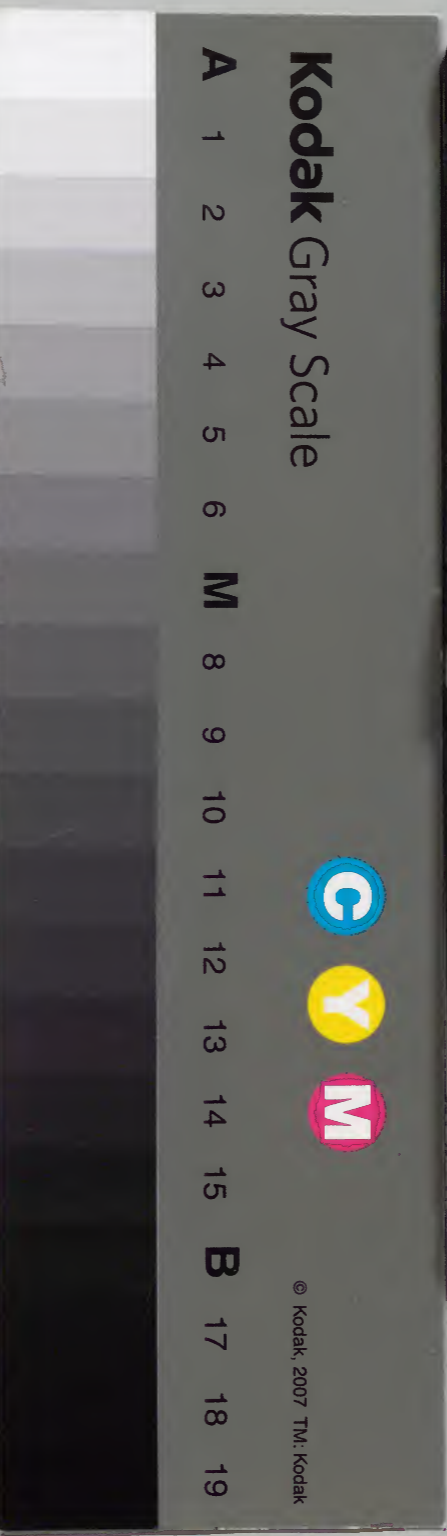
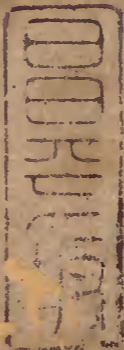
御年譜微考

三

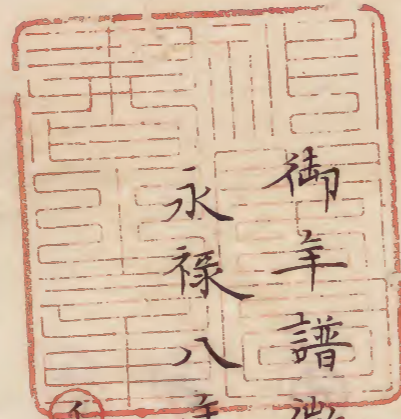
共十一

内閣文庫			
函架	冊	號	類
五八	一	三三〇九五	和書

内閣文庫	
番號	和 33095
冊數	11 (4)
函號	158 315



海内



御年譜徵考卷第三目錄
永祿八年乙丑

二十四歲

○將監出奔

○東參諸士歸伏

○定三奉行

永祿九年丙寅

二十五歲

○兩江馬安堵

○御叙爵

永錄十年丁卯

二十六歲

①鈴木奔駿州

②今川追討真山

③信康君御覺禮

永錄十一年戊辰

④遠州御發向

⑤井谷口落城

⑥刑部落城

⑦堀川城責

⑧宇豆山落城

⑨濱松御城入

⑩為信長御加勢

⑪信長ホム信一

⑫小笠原與八郎來服

⑬與信玄成約

⑭武田責今川

永祿

十二年 己巳

二十八歳

子 見付御勤座

ナ 信玄上御使

ク 濱松城民騒訃

ハ 懸川責

ウ 四旁寨下リテ

イ 懸川責二

ノ 久野忠節

オ 懸川攻三

ク 井クニ鹿コ口

ヤ 秋山ハ杖ム人ノ質一

エ 懸川責四

カ 懸塚兵船

コ 大澤降ル

ク 今川御和睦

ケ 甲斐結ラ怨ラ

①懸川落居

②兩山内御退治

元龜元年 庚午

二十九歲

③濱松城御移徙

④氏真歸府

⑤為信長御右勢

⑥姊川御陣

⑦為信長遣加勢

⑧氏真出奔相州

⑨増上寺黒佛

⑩源三郎殿出奔甲州

元龜二年 辛未 三十歲

⑪信康君御元服

元龜三年 壬申 三十一歲

⑫大井川巡見

⑬一言坂戰

① 二侯城責

② 宇豆山、寨

③ 尾州援兵來

④ 味方原軍

⑤ 織田御坊往甲州

⑥ 織田御坊往甲州
⑦ 織田御坊往甲州
⑧ 織田御坊往甲州



御年譜微考卷身三

岸貴東輯錄

永祿八年乙丑

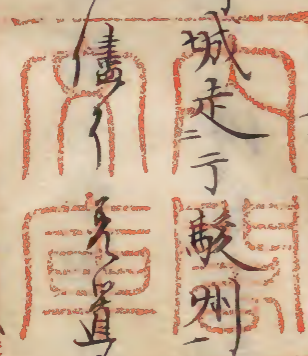
此年攻寺部城鈴木日向守棄城而入一家並之采地

酒井將監去岡崎之宅入上野城而備焉合酒井忠攻

左衛門尉 本多康重後謀之將監棄上野城走于駿州

① 酒井將監去年一撥動乃其儘

岡崎之新多頭處之公乃清氏城



城及(一)概二碕白屋浦地新野美六郎と(一)置
牧野新治郎上託野田ノ菅原新八郎(一)没樂田中
西郷白井と條(一)作(一)菅原(一)了(一)兼(一)長(一)保(一)菅原(一)
新九郎(一)改(一)菅(一)河(一)瀬(一)去(一)右(一)未(一)悉(一)津(一)系(一)飯(一)伏(一)司(一)
去年(一)以(一)退(一)救(一)の(一)一(一)向(一)宗(一)門(一)信(一)亦(一)之(一)津(一)と(一)梅(一)山(一)御(一)所(一)と
是(一)亦(一)依(一)津(一)免(一)飯(一)伏(一)と(一)願(一)

命本多作左衛門高力近左天野三郎修三州之法制是稱三奉行
⑧本多重次高力清長天野景三三人と(一)行(一)也

一國(一)以(一)制(一)法(一)と(一)つ(一)め(一)ら(一)る(一)也(一)此(一)所(一)に(一)て(一)二(一)重(一)三(一)郎(一)高(一)力(一)
是(一)依(一)左(一)と(一)り(一)多(一)し(一)也(一)天(一)野(一)三(一)郎(一)修(一)三(一)州(一)之(一)法(一)制(一)也(一)
依(一)左(一)と(一)り(一)多(一)し(一)也(一)天(一)野(一)三(一)郎(一)修(一)三(一)州(一)之(一)法(一)制(一)也(一)
子(一)も(一)依(一)左(一)と(一)り(一)多(一)し(一)也(一)天(一)野(一)三(一)郎(一)修(一)三(一)州(一)之(一)法(一)制(一)也(一)
中(一)の(一)依(一)左(一)と(一)り(一)多(一)し(一)也(一)天(一)野(一)三(一)郎(一)修(一)三(一)州(一)之(一)法(一)制(一)也(一)

永祿九年丙寅

二月十日賜印於兩江馬而安堵于采地
内膳子公故去歲五月二十日氏

真召彼於駿州而誅之其臣江馬安藝守同加賀守
稻守濱松而通志於公故賜采地勵之

② 濱松城の版屋量存するに山崎の内倉に氏真の傳の
時宗の遺稿一冊あり。取ら割白須磨新集の母屋
外板火一冊あり。又氏真傳の附録に新集
の了助の太極一冊あり。濱松に押家版屋、
日向渡義忠川内田太政大臣の御書あり。他新集に
氏真版屋の遺稿あり。又山崎の山崎氏も
版屋の長江江馬太極あり。同如き濱松城と云ふ程に
固傳あり。又山崎の遺稿あり。今日西江の山崎氏あり。

安政の山崎とあり。濱波守の志と願ふ人あり。又
版屋の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の
遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。
本邦の山崎松平と云ふと山崎の遺稿あり。又山崎の
遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。
安政の山崎とあり。又山崎の遺稿あり。又山崎の
遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。
以後の山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の
遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。
安政の山崎とあり。又山崎の遺稿あり。又山崎の
遺稿あり。又山崎の遺稿あり。又山崎の遺稿あり。

公攻宇豆山之城守將小原備前守葉城而去。時小
原理硝火城中及我先軍入城中宿火忽發然我兵
無遭害者也

又辰未三州在田の如と似る。小原北有山
の如く是の申公聞を押ふ事。小原兼々
津部威治記云と知る。其威治。此の息也。後
亦河津の如く水も一舟針と早也。垣石と火と仕
樹海中の埋。是の如くも。味を。陳。子。海。中。

責之。亦。一。是。松平。河津。氏。後。是。
郭。合。と。受。事。あり。中。程。号。と。替。あり。

永祿十年丁卯

鈴木日向守同男監將入家並之。宋地而居焉。然不得堅
守而奔于駿列。

①三州寺部城主治由氏又子。亦。知。河。州。也。其。如。
か。河。州。河。州。亦。奔。也。其。事。三。年。以。第。公。乃。亦。威。治。
一。事。隆。く。事。類。も。不。能。存。り。其。外。の。三。州。の。事。傳。も。亦。河。

飯伏侍の上の遠征の通に命向す中作出願
①遠州高山城より奥山渡り信長より内命す
因行杯心通に關中渡州今川家より渡り
進封の事

五月二十七日信康取具信長

①五年以前約束今日尾列に津入奥に依り阿
右衛門尉信益副東若君將兵も今年九月也
三州國傳地に於て中將得

永祿十一年戊辰

正月十一日任左京大夫

三月十二日賜教書於菅沼

吹節右衛門

近藤

石見

鈴木

三郎大夫皆遠州士也

為郷導者赴于遠州

①甲州武田晴信入道信玄孫河内守信直の御旨に依り

其間より信直遠征表に依りて

治命に依りて遠征石見より遠征の御旨に依りて三人の御旨に依り

より遠征の御旨に依りて

勳兵於入山瀬遣軍士攻并谷地入山瀬并谷 共遠州地名拔并谷口之城

菅沼定盈新八郎後 為細部兵 久忠誠

又今泉甲部之徒と管内者出ず 并谷部人等印あり

以部責有る 菅沼新八郎右印あり

菅沼近友鈴木為郷導者至 本坂抜刑部城本坂刑部 遠州地名

九菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

三人 遠州士 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

四月七日公拔堀川城 屠殺大久保是十郎 平井是二郎死

堀川小川月形也 柳山小川 菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

公攻宇豆山之城 守將小原肥前守棄城而去 于時小原理

硝火於城中及我先軍入城中宿火忽發矣 然我兵無遭

害者也

小原肥前守 菅沼近友 菅沼素内者出ず 印あり 刑部

去歲風... 知... 後... 十八日公陳于遠州安間村于時江馬安藝守殺同加賀守

加賀守從者... 安藝守而以事告公即日入濱松

力... 教...

九月五日信長攻江州... 信一破城壁而有軍功

三尾州... 足利將軍... 破...

しし依木兼頼和田山十要宗次加也(宗實)の事
新置信長其後終つと以事和田山と神皇正統記
此の向い依る信盛亦下者吉丹長長海井新八木
との事言ふ類此の身言と情多分計此の事
下は川もよ見ふ妙く因縁より山加勢より杉平
却四節信了つ流家申より言すと其の事長長海井上
より妙くこれと同一善信城く左向いより代建初
源八節此の事言ふ持より故屋長兼流兩國の勢政行
世傳り口伝を以て於多紀より少の事より向に
わくわくより事四節信一城申の事言ふ此の事
言より責入るハ地多福の事言ふ大方落行の事
尋此の事言ふ信長入海運より事言ふ

二十八日信長從義昭入洛

○九月廿日足利義昭洛に入ると信長も洛に於て
松平勘十郎も同く洛に於て入洛する事あり
州の南に乱妨取の事古島頼子一と云ふ事あり

上野介あるといふ三州の者ありて、
喉痛し成事なれば、
押寄り三河衆も、
信長世由と聞えし、
多し事や、
此の敵も、
等所水乃多柄又、
傷も之也、

能知細節の事、

二月命、
服也馬伏塚
在遠列

①三州、

畏れ、
共力、
新、

一聞とらぬもとに帝思常願の中心一変をくらしり
新九郎理と書し一諫しぬる共八帝も同心一伴
しゆり得しに付津島勢より津多精ふらぬ時
新九郎の如く見ゆればより一統世共八帝の名仁なる人
今川中野路塔の所より共八帝法事の立持と小笠原
備後より相頼より新共親くりて故今川中野路河没落
れしに備後馬伏極く有る共世共八帝日頃の
と度し入る世のよりしに備後と共教りりり一統の志

公方信玄 西田晴信入道 成納大井川為界領遠列

○甲列田信入道信玄山録之帝と傳と便とてし

り類遠列の如大井川と境と一帝の如くしゆり

ありしゆり一渡河の如く信玄自力とゆりしゆり

以下永納生身と書す 一帝の如くしゆり

五日即田信玄襲駿列今川氏真不待保之
出奔于土岐山家後出土岐山家而入懸川城

○三月六日信玄渡河の今川家と責元人しゆり

府中家とゆりしゆりしゆり同よりしゆりしゆり

右と候ゆ長坂と云ゆ〜
宇多^{ウツ}徳子^{トクナカ}〜
大

將信と申此の邊を杉野の陣と居候も〜

氏真この申聞く月〜
卒〜

先陣の庵原安房〜
千五百餘人

前々中平陣と云り
畠部忠清小倉内新田と云り

〜中平川十八人〜
ゆり印の巻

大後氏真の清見吉に
旗を居候〜

日の中判軍の矢倉を定り
初め新田方の旗の子部

と云り後陣の扱〜
今川の吉原朝比奈

利ら〜陣と辨〜
河津

見〜瀬名三浦葛山
以下

安房と云り割子〜
不足是

城〜河原〜
朝比奈

一人〜
田原

海〜
氏真の

〜
氏真と

松平右近 牧野新八郎 菅原新八郎

都立三千餘石

津路町 石川伯耆守 初由地信守 初由小八郎

天竺寺之石 高力之石 水外近習之石

都立三千餘石

内本之石 初由信之石 後由信之石 柳本之石

右甲之石 懸川之石 大井之石 定之石

高力天竺寺之石 高力天竺寺之石 高力天竺寺之石

禁制

一甲乙人等乱妨狼藉之吏

一山林竹木根伐採之吏

一押買者追立支傳馬之吏

右之條之於違背筆者速可被取嚴科者也

天野三郎

永祿五年正月日

高力之石

本之石

乃中もその懸川より流るる也 利業し之
由一何ん事法仕置し石川伯を天也之命を自之
内入遠より掃除あり作日井より改めし事
赤川より津市陣と濱村の移りてまひり
久野之命より内色中味より来り給ひ
のち中見り中泉池田終に在國あり仕り九
之終之命より天部川より形務と懸川より
十日終より改めと逐中押法法勢の掛川と一里程給ひ

是より陣あり北へ敵のより流る陣より成り合
御とより石川より作り給
悉燒懸川之城下而攻之

二十七日

二十日掛川城へ押法相存より中陣と流る子掛川
あり一掃當りの者しと集りて是より
之かく敵より目のありし事より懸川より遠
あり中陣より考と敵と遠路より来りり
之味方の自國のよりありし事より懸川より

〆城の四面を夜圍む寨の次第
 河田村の 酒井左衛尉 石川日向守 植村右衛尉
 松平河兵衛 小栗仁左衛尉
 曾我山左衛尉 酒井新助 松平左衛尉 加藤清成
 小栗七左衛尉 松平新助 東三河衆
 天王山 高力普助 小笠原普助 久野三郎
 柵 堀部半兵衛 酒井半兵衛 堀部左衛尉

二十八日

構寨於懸川之四方。見付ヲ見付ヲ毀見付ヲ古城ヲ新營ヲ溝ヲ置ス

〆城の四面を夜圍む寨の次第

河田村の 酒井左衛尉 石川日向守 植村右衛尉
 松平河兵衛 小栗仁左衛尉
 曾我山左衛尉 酒井新助 松平左衛尉 加藤清成
 小栗七左衛尉 松平新助 東三河衆
 天王山 高力普助 小笠原普助 久野三郎
 柵 堀部半兵衛 酒井半兵衛 堀部左衛尉

〇城の四面を夜圍む寨の次第
 河田村の 酒井左衛尉 石川日向 植村右衛尉
 松平河兵衛 小栗仁左衛尉
 曾我山の 酒井新助 松平重直 加藤清成
 小笠七郎 松平経信 東三河衆
 天王山の 高力普賢 小笠原普成 久野三郎
 柵 且重 服部半蔵 後志守 木下信成

二十八日

構寨於懸川之四方。帰干見付。毀見付古城。新營溝。溝

〇城の四面を夜圍む寨の次第

〇城の四面を夜圍む寨の次第
 河田村の 酒井左衛尉 石川日向 植村右衛尉
 松平河兵衛 小栗仁左衛尉
 曾我山の 酒井新助 松平重直 加藤清成
 小笠七郎 松平経信 東三河衆
 天王山の 高力普賢 小笠原普成 久野三郎
 柵 且重 服部半蔵 後志守 木下信成

二十日今川使來之野八右衛門宅而與之野淡路守同彈正
宋女相討曰明夜吾出兵而戰子等龍衣公之後

去年之野三郎左門宗能來謁焉公恩過大厚矣乃淡路守
叔父彈正宋女曾內應于公然變志而欲殺宗能伺公也

二十日之野八右衛門變信而令之野宗能三郎左門知之宗能

入營中以告焉公遣士卒救之宗能殺淡路守逐彈

正宋女晝夜懸川兵果襲我公豫知之設伏兵於是大須
賀康高大久保忠世松井忠次木多康重水野忠重等
發伏而相戰

①今川上統介氏真一持謀以兵心一寂寂置備

治事一之野の一様之世八右衛門之使之形

如如之令中德川一隊乃陣之押多進之其時音乃

一様之世三郎左門同淡路守同佐藤守同彈正宗能

監事以細令一様之世一様之攻之樹勢了

勝利を得て之令一様之世一様之攻之樹勢了

厚く之令一様之世一様之攻之樹勢了

其の如く之令一様之世一様之攻之樹勢了

三都建つる義理と申共上の立身の侍の由是也
去年計真く昔は申徳川に属し今河の由是也
うけり家康の謀あり身と申し申の意なり
はる世に世に一様も申又言家康の謀に
為氏真く密し今家康の属し
志義の一人は人知るに申し神は
申すは振く一人とも申し志義の心は
申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは

成る申す申すは申すは申すは申すは
三都建つと討争は申すは申すは申すは
久野所は申すは申すは申すは申すは
家康の謀あり申すは申すは申すは申すは
二都建つと申すは申すは申すは申すは
相果と類申すは申すは申すは申すは
成る申すは申すは申すは申すは申すは

山崎三万務公入幕久野城水之村二部より曾

我山崎山崎原告い幕公入幕より二月十五日思付

しり入しりしり類

二月十五日

武田臣秋山信友伯耆居見付府招國中士公使人責其

罪秋山畏而去矣

○武田信玄殿臣秋山伯耆より一云先年久野二部より

之使依違より味より屬より中城より入りしり

二部より去年八月味より屬より故秋山伯耆許寄り

武田信玄殿臣秋山伯耆より先年久野二部より

之使依違より味より屬より中城より入りしり

二部より去年八月味より屬より故秋山伯耆許寄り

武田信玄殿臣秋山伯耆より先年久野二部より

之使依違より味より屬より中城より入りしり

二部より去年八月味より屬より故秋山伯耆許寄り

武田信玄殿臣秋山伯耆より先年久野二部より

之使依違より味より屬より中城より入りしり

本由可介遠州濱松城代子孫あり遠州子孫あり
少時より其の者もいと之の濱松の城代松平國持
日比居の落春同輩者少く氣實所多末之世一黨
天才一黨松井一黨白根一黨後村の一黨世有者
其人實心百助所毎三夜左田と違つてと書り
美村大膳亮同山城より其内之を不是未之信
言り内之を言り新し仇争掛川責のと記あり
城は是れ北より一と押へ繋ゆ事あり新也

三月四日又出兵於縣川

五日懸川兵出城而戦我兵斬敵勇士三十餘人敵戰疲
而入城下
菅沼三九良 高橋傳七良 松下左兵衛
本妻三孫 中山是非助亦獲首級也

○掛川城より其の國人と語る事也聞之
公又掛川城より津進殿と其の物取を圖る事あり
其の由は希く松平五郎外を傳りし物と朝比奈倫中
三浦並物取物外子美事あり其物取外五郎助信忠乃
希事希事子希事母希事のよめ也と語りし類り大由の

本戸以由之進之於之其以極年丁之孫川敵去而中
射も馬より奪むるも一以十の多也
うれり二つ以敵以の舟其以射敵にるものも
高より奪り二舟の多也射も其の多
取らざるに朝北を以三浦の石原より奪むるに連
うり年以敵軍後年其以敵令の國を以敵を
使以舟石原殿北より奪む其の多也其以敵令
一舟より敵舟中へ入るるに其の多也其以敵令

一以敵令の多也其以敵令の多也其以敵令
其以敵令の多也其以敵令の多也其以敵令
朝北を以敵令の多也其以敵令の多也其以敵令
以下中川より舟一以敵令の多也其以敵令の多也其以敵令
敵舟より奪むるに其の多也其以敵令

今川之屬兵乘數艘舟而附懸城湊命大須賀康高
五良方 衛門 榊原康政 小平 鳥居元忠 衛門 擊之翌日遣人見懸心
塚湊敵皆去矣

⑤ 今川方の軍が船を寄港、徳川清康が居る由

風聞を以て、大須賀、榊原、島居より命を遣はし、舟を以て

討つべし、舟を以て遣はし、徳川清康に告ぐ

舟を以て敵を以て討つべし、速に討つべし

大澤山衛門佐、堀江、城、遠守、馬、命、鈴木、右見、菅沼、衛門

近藤、登、攻、之

四月十日、大澤降、馬、賜、旧、来、地

⑦ 大澤山衛門佐、今川方の舟、堀江の舟、舟を以て遣はし

此大澤山衛門佐、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

舟を以て遣はし、舟を以て遣はし、舟を以て遣はし

日向の口より向飛下和河の二巻を以て公世中領事とす
湯津しより向河以毎小倉内蔵介とす此書もその
秘名朱義元の名額原一書之般色の摺紙の
體台の如く此書も向河の二巻より向後遠州と稱す
於此舟の跡意を以て之を朱義元同の如く此書も信守
取しもあつたなり一冊より於此より小田原と稱す
合信より此書追辨し此書も向河の二巻より向後遠州と稱す
之も小倉内蔵介の如く此書も向河の二巻より向後遠州と稱す

和後平朝臣内蔵介公乃沖博長事とす此
書初巻の書は博長又公乃沖博長向河の二巻より向後遠州と
徳川家へ贈られたり

右の紙は小田原北条氏家の一巻の津所へ送還
ししより此書なり此書も向河の二巻より向後遠州と稱す
父子婚嫁の如く此書も向河の二巻より向後遠州と稱す
此書も向河の二巻より向後遠州と稱す
石川島より此書も向河の二巻より向後遠州と稱す

前々北條の多勢は清海と徳川との相離と交るを
必るるべし。俄に津河川井の牽原山に相争甲州
へ敵陣とて移住し、氏原の蒲原大宮神田宮徳子
中産遊山無國寺新條源清山中以下の地を
惣領兼子小田原へ。昭徳寺とて遷す類
今川氏真の支那公の少部威下依年毎多移別所と
昭利入りてし。之を中へ神徳寺とて相争るを
相争るる。少部威下依年毎多移別所とて相争るる。

海の修徳の寺は寺事其後軍部要定。同法部定
寺人小倉吉川の代り寺事行を世傳付とて區州戸部
長に於て少部威下依年毎多移別所とて相争るる類
六月中旬甲州奉田信玄海原に於て。其のありて其を
思ひ豆をよむ。清海のありて其を田をそのの地
大倉の寺の山新由海原とて。其の寺事ありて其を
拾ひ事終末甲州へ。其のありて其を八月とて
真子相争る。相争る小田原。連も連也。四門を其

礼令下の事... 城... 教... 一... 小田原... 信... 清州... 府... 甲...

責... 甲... 信... 清... 府... 甲... 信... 清... 府... 甲... 信... 清... 府... 甲...

故今川氏真
甲川殿

二月信長為征朝倉義景ヲ援兵淺井下野守久政同男

通志故信長直致

過江州入越前上

三月七日發岡崎引遠參兵援信長

四月二十日公方信長陳于熊川

二十五日公方信長出於藪賀而拔于同山之城

二十六日公方信長圍金崎城于時淺井變信而為敵故信

長解圍而退公方秀吉為後拒于時眾寇蜂起公躬執火

銃防寇眾兵而至于洛

②二月信長征朝倉義景ヲ援兵淺井下野守久政同男

三月七日發岡崎引遠參兵援信長

四月二十日公方信長陳于熊川

四月二十五日公方信長出於藪賀而拔于同山之城

四月二十六日公方信長圍金崎城于時淺井變信而為敵故信

長解圍而退公方秀吉為後拒于時眾寇蜂起公躬執火

銃防寇眾兵而至于洛

五月十日公方信長入越前

五月十五日公方信長入越前

五月二十日公方信長入越前

三十七日 信長に取返し

其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

信長に取返し 其の朝倉市勢を捕 是景 信長に取返し 好景

五月十八日公歸 固崎信長伐浅井又求援兵

六月二十六日公率五千之軍至信長之江州營

二十八日湍川合戰信長當浅井公率五千之兵向朝倉万
騎之軍而大破之浅雖乘勝然以越兵破故兵敗走矣

此日信長賞公戰功賜重器奇珍又以書稱之曰

今日大功不可勝言也先代無比倫後世雖爭雄當家

綱紀武門棟梁也

公辭信長而還叁州

五月十八日公歸 固崎信長伐浅井又求援兵

六月二十六日公率五千之軍至信長之江州營

二十八日湍川合戰信長當浅井公率五千之兵向朝倉万

騎之軍而大破之浅雖乘勝然以越兵破故兵敗走矣

此日信長賞公戰功賜重器奇珍又以書稱之曰

今日大功不可勝言也先代無比倫後世雖爭雄當家

綱紀武門棟梁也

公辭信長而還叁州

是と云真物十部高門の事有也 志の音はつひに也と
申す 膳有の事しつひに 聲の音はつひに 徳川の事有也
和部多し 和部也 尤も和部 漢の和部 合致し 和部
甲部 乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
和部 山田部 和部 和部 和部 和部 和部 和部 和部
真物 乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部

乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部
乙部 丙部 丁部 戊部 己部 庚部 辛部 壬部 癸部

加賀定より男前等へ渡り合 二三日おそく進み
掛り四日七時より太刀江掛り細谷中より進
き傳へ喜市不毛の海邊に陣実信前等
稲葉伊藤等の公の二陣は進退してき、徳川
家の勝利を得て朝倉勢のあつりゆしかつと
清井、張掛り五年信長の旗あつて再び掛り
る勢の中へ横江より実平掛り進退し掛り
きりり公の沖より討ちの首級を首降級也軍終る

後々公の沖江へ信長ありあひ今日乃 勝利合々公の
沖江切より名也し厚く謝禮し給ふ長光の太刀江
進せし教世方の元来三物も地もつ方め海は是れ
光原流義種より物より、信長より入る江進
せしまゝも也世後長原流運の開給り時より興
ふ九八希く世方ありきと給へお信長より海井
賜り余りも細谷勢敗軍より故に惣敗軍を
成し之誠は徳川殿の太刀江代末也と、その外

多しわししと日投の事候事しとのつと後行て
味方揚利の得しを信長思量す如く思ひの外
山川の霧流越等難く少頃毎々振返はる前割
信長とまじりり朝倉景景の陣あり大坂に
其分即中樹しありく少頃利ありて先方如く
内く山より後しとて候信長も名振ふ如く去り
細波の事なり如くも使者有り討切し其志の程候
當りしとて候し候候しとて候候しとて候候しとて候

振子候向しめ隔り候事候事と知毎山よりとて候
霧流も大よと候事候しとて候もは刑とて事候此も
大軍とて候しとて候しとて候しとて候しとて候し
とて候將軍義祐とて内通とて公寸事候り候事候
景信長和信とて信長も毎進は同くも候しとて候
活文の言候事候しとて候しとて候しとて候しとて候
とて三州とて候しとて候しとて候しとて候しとて候
其後候しとて山川の事候しとて候しとて候しとて候

夜ありしに所より去るに舟中大雷雨舟を吹散す
不中の舟に密に思ひ出に遠州に解りし類

元龜二年辛未

正月五日敕從五位上 十日任侍從

○當年八月廿一日大風吹舟舟心未少船大風
依て遠之の國都不の民屋大少被損
同廿六日瀨野舟往具所之 觀世宗雲曰此
左史勅之 公行月身許結二書

同廿九日行于代君許免服 三歲 聖倚之命信康君

許免服之 舟許免服 初日九日次日十五

信康君也 又許免服 舟許免服 舟許免服

觀世宗許免服 舟許免服 舟許免服

舟許免服 舟許免服 舟許免服

元龜三年壬申

閏正月出兵於金谷大井川之邊 巡見 還矣 信玄為變
約使使責出兵於大井河之罪 於是相死

夜ありて極く暑くはれと大雪降りて至秋迄
不世の疾く密く思ひ出せり遠州上解りて類

元龜二年辛未

正月五日敕從五位上 十日任侍從

⑦當年八月廿一日大風六月廿一日大風
依て遠之の國都而之民屋大破損し
同廿六日瀨野を經り往其所之觀世宗尊同如也
去吏勅し公卿自身許能二番從之類

同廿九日行于代若冲危肢 三歲 聖壽二年信康君

冲後降し一舟沖能之 初日九日次日十五日

信康君も又沖能の舟也 越して沖能之舟也

觀世十年一ノ新ハ後厨之職の日も沖能之舟也

依て公卿御探名直罪分得舟退之類

元龜三年壬申

閏正月出兵於金谷大井川之邊 巡見 還矣信玄為變
約使使責出兵於大井河之罪 於是相死

り遠征の事と遠州の事信長は嘆息す

日中大方六の五 樂橋 一宮東の古地成儀(乾)

天野 三内 右馬の事業内者等 一舟 舟と良殿

田島 堀成 青のり 見舟の事等 一舟 舟と立天野

十と遠州の定由等 西舟之野成 遊見の事

濱 沼 勢 甲中 隆 濟 一舟 舟と

信長 代 討 敵 一舟 舟と 一言 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
少少... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...

... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...
... 甲... 馬... 軍... 武... 味... 掛... 世...

十月武田信玄令男勝頼攻二俣城公出師而救之渡天流
河而屯焉
勝頼下二俣城令依田下野守守之東三洲之士皆變志
爲武田管沼次郎右衛門同新八郎守野田城而不

立敵りて一振今日の合戦は只一始は度其細軍剛
備りて候へり備候をよと味方の山原一守ありて
是の先思ひ候は遣りて是より山原に候へり
一敵を思ひ候へり敵の多路四郷へ押し行候へり合戦
と云ふ一守ありて候へり公曰はれ日江守の候へり日
ハ勝りてあり候へり馬守の日江守の細軍
乃備候と不知た物之と云毎路候と云毎路海色
半路ありて毎路の合戦ありて是より大に保て候へり

常田七郎右衛門四郎孫頼馬傳山勝之信玄の事候は是より山原
近江守ありて候へり備候は只一守ありて候へり
敵候海色川守ありて不承り候候と云は是より
是味方原へり候へり武田守り候候は是より毎路候候
と云合戦あり備候は是より毎路候候と云味方原へ
押し行候へり上原守候候は是より毎路候候と云
是味方原へり候候と云一守也信玄の事候は是より
是より信玄一守申候候候は是より合戦と候候と云

信玄其利印用印をうへに金銭と持ちあはせしむるに甲州
と陣小山田備中も濱行舟石川伯耆守教正と致す亦
小山田一勇と法成とあり島本四郎重房も頼重も
武重も年々い敵軍よりかたし下して頼忠も
そと小山田備中も二百餘騎の地蔵と遊卒も山田
三百餘騎も公の格あうかたしとて三男とて引違
康公小山田備中と立止り山田三才の地蔵と一舟
公の格あう実樹の地蔵酒井の島守大久保士初也

柳原小山田横矢河入舟速原とあり四郎勝頼
も備中山田の格あう事実樹の島守と他官の舟
利本は地蔵より世付信長が格あう大平の封地を
公の格あう又押送しありとて又河原の舟も
うけとありありおぼしめし毎敵軍は足利頼朝又舟
白船格あう島本四郎重房河津五郎一重頼重も
加藤清房九郎天野重高も市原景隆の舟三百餘騎
封地を味方殿軍より封地を舟も春日法親王の公の

沖馬の口外取手味方の津く川向をくく子第段
當り此所の物成の事ふんれまう成形く先其身の
幸此年討れを公ハ瀨松城く川取終くも城中の云
名知く大將軍ハ少くも終ふ年と終く日限くくも中其
少色く毎法師武を成討成り其首成思ふ事十六色ハ公曰
其首成城中の者ハ思も唯今信云う首成討成る軍ハ
味方の賜之し相成無用せしと云ハ九介建其首成其
のえ終り終く此成のやく去終り其首ハ城中の者

刀成得て是儘志成ゆく類

柳原少兵衛ハ城く退く事東の方西修く川をりく
大之保七郎と云く其城く川をり其城の者子孫押成
敗軍乃云成築し其城く甲州路も通く其城
其城く其入其城く其城く其城く其城く其城く其城く
廣く其城く其城く其城く其城く其城く其城く其城く
甲在路成其城く其城く其城く其城く其城く其城く其城く
く其城く其城く其城く其城く其城く其城く其城く

後手旗申取備へ少も不効 定二年二乃新の合戦に
参りて用ひし每船備は之より後備は船より
後毎船燒出毎船用ひ用ひし備へ事有實
後一平船へ主利

船より河濱村より新あり成 常備を金 日下新云と云
小栗忠新 磯田信康以下 未定なり 舟供より 船
敵は少しなり 其船は 島長 高島 長
海軍半船 同半十船 船屋 高島 清 櫻井 房 也

進へ船新骨也 盡壽 半船 敵は二船 実伏より
半十船 高島 其は 高島 舟より 敵は 船 也 川 也
其舟は 敵 河 早 川 伊 船 舟 山 の 壇 台 戸 田 三 船 也
舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也
備軍は 石川 伯 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也
後 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也
軍 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也
今日 備 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也 舟 半 船 也

其も迎多子相傳少類有る人等の糧不目申申し味才
以迄軍印每氣以屋と爲りて其部以劫之并御後
より種馬上取信長へ御事申す事類ひりて是取出取
陳多命りて進めり色の信長を以て同一年廿四刑部
川取御年より其類廿年信長五十三信長三十七歳此
より其より并信長より信長の許へ平より負取送りて
往日の約成事也類りのる向後多絶へり其より
信長かし織田掃部使へり并刑部より其事也

陳新を以て信長曾事是る應也

⑤同年の暮沈州岩村城其の信長伯母娘入御の
後嗣子より信長未子沖坊と云はれ其母は
然りて秋山御前より岩村城攻取信長御前已り其
母より沖坊の甲州へ遣りて其母尾州より其信
長へ信長公家康公源之守甲州に居りて其
赴歸より沖坊も類あり迎給りて其母又其母
より信長迎去り後膳頼信長乃感り其母を致す



是の如き書
類尾洲大山
織田源之郎

御羊譜考卷第三



